

令和 2 年 6 月 20 日現在

機関番号：13901

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K13182

研究課題名(和文)60年代日本ドキュメンタリーの対話性 多様性を内包する「対話的様式」の研究

研究課題名(英文)On Dialogism of the 60s Japanese Documentary: A Study for "Dialogic Mode" of the Film Representation

研究代表者

洞ヶ瀬 真人(Dogase, Masato)

名古屋大学・人文学研究科・博士研究員

研究者番号：10774317

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文):60年代の日本ドキュメンタリーに頻出する、多様な人々の声と姿を対話的に表現する手法を「対話的様式」と名付け、その実践的形成と意義を探究した。その結果この様式では、1)映像をめぐって、映画・テレビ・ラジオといった多メディアの特性が混交することで形成されていること。2)作り手の政治主張の押しつけではなく、制作側の視点と撮影対象の矛盾を映像に表現し、視聴者に投げかけ考えさせることで、問題に対する関心を内面的に育む可能性があること。3)意見対立が複雑化する現代的な社会問題に呼応して用いられていること、などが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的には、多メディアを横断する映像文化の関係性を「対話的様式」という視点で浮き彫りにした点に意義がある。一方、この様式が、原発、沖縄問題、戦争責任等、意見の割れる複雑な問題が再び表面化し始めた現代の事象をドキュメンタリーで表現するための指針になるという点には一層の社会的意義がある。撮影対象に対する人々の声と姿を、否定的なものを含め多様な対話として表現し、多くの人々の政治意識を涵養するこの様式の可能性は、多様な人々がそれぞれに意見を持ち、合意を形成してゆくことで成り立つ民主社会の維持に必要なものだろう。

研究成果の概要(英文):Defining a film expression seen in the 60s Japanese documentaries as "Dialogic Mode," which dialogically displays people's diverse voices and behaviors, I delved its actual configuration and meanings like these. 1)The plural media specificities' hybridization among cinema, television, and radio generated this mode. 2)This mode can not compel the spectators to the producer's political opinion but foster their political awareness through its methodology that a revealed contradiction between the producer's view and the filmed subject triggers the spectators' consideration of the issues. 3)The usage of this mode is in concert with the contemporary social problem in which the political conflict is more complicating.

研究分野：映像メディア研究

キーワード：ドキュメンタリー メディア史 放送文化 安保闘争 水俣病 学生運動 映像表現 テレビ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1)1960年代において、日本ではドキュメンタリーのあり方が激変していた。こうした傾向は、海外のドキュメンタリー研究でも、撮影する出来事に対して観察的になる、制作者がその渦中に入り込むといった世界的な様式的変化として指摘されている(Nichols 2016)。だが、日本の60年代作品にはさらに独特な特徴があり、特に、被写体となる様々な人物の語る多様な声と姿を、作品の政治的意図に反するものであっても入念に撮影し、公平に作品に組み込んでいる点は、世界にも例をみない。また、こうしたドキュメンタリー表現には、出来事に対する多様な意見を見せることで、視聴側それぞれの議論と判断を触発する民主的な意図が込められていた(佐藤1977)。人々の対話を映像上に表現し、観客にもその対話への参加を触発することで、社会的な政治意識の涵養を図るこのドキュメンタリーのあり方は、現代の民主社会を維持するためにも役立つもののように思われる。そこで自分は、こうした手法に「対話の様式」と名付け、これが60年代ドキュメンタリー文化の営みの中でどう形作られたのかを論ずる研究を思い描いた。

(2)この問いに対しては、ドキュメンタリー史の先行研究のなかにも、系譜学的な観点でいくつかの示唆があった。映画史研究のなかでは、主に、次のような観点が提出されている。ヌーヴェルヴァーグやシネマ・ヴェリテといった海外の映画運動の影響に重きを置き、50年代のドキュメンタリー制作で主導的な位置にあった岩波映画を起点に影響の系譜を辿る研究(Tsunoda 2015)。50年代末から松本俊夫が主導した前衛記録映画運動やその理論を起点に、新しい日本ドキュメンタリーの展開を考察する研究などである(Nornes 2007; 金子2017)。またメディア史研究では、50年代末に始まるNHKのテレビドキュメンタリーに新たな手法の起源を見たり(崔2015)、その番組制作者がもともと携わっていたラジオ番組のあり方に60年代ドキュメンタリーの源流を見る、映画史の文脈からは見えなかった観点が提出されていた(宮田2014; 丸山2019)。こうした観点は、それぞれで、60年代ドキュメンタリーがいかに形成されたのかについての説得力ある説明になっている。

一方これらには、映画、テレビ、ラジオとそれぞれが扱うメディアの枠組みだけに焦点を絞った論述傾向がある。そのため、いずれかの議論に即するだけでは、60年代ドキュメンタリーの新たな有り様を現実に即して捉えるには不十分だとも自分には思えた(例外的なメディア横断的議論は、Furuhata 2013)。近年様々な分野で注目を集めている、新しい唯物論や思弁的実在論の提起する現実の事象に向き合う姿勢は、これまでの学術的な観点到様々な面で変革を迫まっている。特に、B・ラトゥールの社会学批判は、文化研究にとっても見逃せない問題を提起した。その批判は、「社会的なもの」という他からは区分される学術領域を前提にしたこれまでの社会学は、その枠組みに当てはまらない現実の事象を捨象しながら還元主義的に学知を形成してきたため、社会学の内側で想定された「社会」の枠組みを強化するだけで、実在する社会的世界を捉えられなくなっているのではないかと、言うものである(ラトゥール2019=2005)。この批判に即してこれまでの映画・メディア史研究が提示してきたものを振り返ったとき、次のような疑問が浮かんだ。これまでのドキュメンタリー論には、同様に、どこかそれぞれに想定する「欧米的なもの」「映画的なもの」など、言説や各媒体の特徴から導きだしたメディア研究の枠組みを強化する議論に留まりながら、現実に行われた60年代の新しいドキュメンタリー実践を捉えそこなってきた部分があったのではないかと。そこで、この問いへの応答として、ラトゥールが「連関の社会学」と呼び提示した対処法にならば、既存の言説やメディアの枠組みに囚われず、研究対象とする新しいドキュメンタリーの担い手(アクター)を、人物、メディアや社会事象、映像表現そのものなどからできる限り見つけ出し、おのおのがどう関わっているのかをたどり続けるメディア横断的な研究を構想した。

2. 研究の目的

(1)1960年代に制作された日本のドキュメンタリー映画・テレビ番組の映像表現に顕著な、被写体となる様々な人物が、自らの思いをそれぞれに語る肉声と姿を凝視し、作品の中に対話的に配置してゆく手法を「対話の様式」と名付け、その映像実践と意義を、主に映画・映像メディア史および社会史の観点から明らかにすることを目的とする。

(2)この様式の注目点は、ある社会運動を撮影対象とする場合でも、政治参与を訴えるだけでなく、人々が運動に抱く否定的な意見も含めた声の多様性を作品に表すために用いられ、場合によっては、相容れない他者同士が、制作者の手で作品の中で対話しているように描かれるところにある。ここには、政治的意見の多様性を作品に紡ぐことで、政治問題への一方的な呼びかけではなく、討論会での対話のように見る者それぞれの思考を促すような効果が生じている。こうした手法の再検討を、単なるメディア史研究としてではなく、原発、沖縄問題、戦争責任等、意見の割れる複雑な問題が再び表面化し始めた現代にこそ役立てられる、現代的なドキュメンタリー手法の探求として行う。

3. 研究の方法

(1)具体的には、「対話の様式」の成立過程を、映画、テレビ、ラジオなどのメディアを横断する関係性、また制作者たちの意見や実践の対立・ずれなど、アクター間に生じる複雑な交渉関係を追跡し、読み解く手法で、次の時系列に立てた6つのテーマに取り組んだ。

1) 初期テレビドキュメンタリーが示した新様式 NHK『日本の素顔』をめぐる論争

- 2) 『記録映画』とテレビドキュメンタリーの歴史的共生関係
- 3) 安保闘争によるプロテスト運動描写の変容
- 4) 映画作家とテレビドキュメンタリー NTV『ノンフィクション劇場』の試み
- 5) 60年代後半のプロテストドキュメンタリー 小川プロ作品など
- 6) 水俣病事件とドキュメンタリー

(2) 論考を展開するに当たり、以下の理論的観点を補助線として用いた。

全体を通して、R・ウィリアムズがテレビ文化論の中で描出した、「操作」から「放送」へのメディア環境の歴史変容を念頭においている(Williams 1974)。これによれば、その歴史には、イデオロギーの画一的な伝達によって市場支配や大衆啓蒙を企む「操作」的なあり方から、様々な情報の配信と多様な人々との共有を主眼とする「放送」に向かって変容する大きな流れがある。テレビは後者のあり方を代表するメディアではあるが、「放送」への変容は、昔からある映画などの他メディアも含めて広く影響される環境要因として示される点が、ウィリアムズ論の骨子である。これに倣い、テレビがメディアとして主流になるこの60年代の背景には、「放送」のメディア環境が映画などの他メディアにも広がりつつあるとの想定のもと、「放送」と、作り手側の意見の一方的伝達から脱する「対話的様式」との連関を探ることを論考の軸とした。それゆえ、間メディア的な議論を心がけつつも、議論の力点は「放送」のあり方が可視化されやすいテレビドキュメンタリーにある。だが、テレビドキュメンタリーそのものに「対話的様式」の根源があると考えているわけではない。

ラトゥールの非還元主義的分析手法に倣うにあたり、その基本所作となる、アクターたちの「論争」を同様に注視した。研究対象に関する「論争」には、複数のアクターの異なる観点が、多様なものごとを巻き込みながら交じりあい、その対象が組み立てられてゆく動的な過程が具に現れる。そのため、それは、対象を既存の社会学の観点からではなく、現実の動態に即して把握するための格好の場となる。「対話的様式」が現れる60年代、幸いにもドキュメンタリーをめぐる大きな論争が実際に生じている。本論ではこれに着目し、そのなかから、政治イデオロギーの一方的な啓蒙ではなく、政治に対する「対話」の触発へと方向性を変えてゆくドキュメンタリーの働きかけの変化を描出することになる。またこれに関連して、扱う映像作品も、アクターたちの「論争」ならぬ「闘争」を描いているため、衝突する観点の多様性や変化などを把握しやすいプロテスト運動のドキュメンタリーに力点を置いた。

特徴的な映像表現を、ある人物(作家)の創作物として論じてゆく手法は映画史などで採られてきた古典的研究法だが、本論では「対話的様式」を、人物に帰着する表現とは異なる、多様なアクターの集合的な実践を通じて具現化した「様式」と捉える。この点を特定の人物の行為に力点を置きすぎずに示すため、G・ハーマンが示す、様々な歴史事象の「共生」関係を読み解くオブジェクト指向実在論の手法にも倣った(ハーマン 2019=2016)。人物をも、モノのような対象と同列に扱うこの考えでは、例えば、ある人物が直接的に関わっていなかった物事についても、その人物が物事と同一の時空間に、ただモノとモノとの関係のように「共生」するだけで何らかの関係性が生じていると見なして考察に加えてゆくことになる。これに倣うと、映画だけに携わっていた人物とその時代に「共生」していたテレビの間に生じるような、作家中心的な視点からは見えなかった間メディア的な関係性も考察の対象に含むことができる。

「対話」に対する理論については、その代表的なバフチン理論が示す一つの言語内容に収斂しないポリフォニー的な意味作用はもちろんのこと、F・ガタリがバフチン理論から引き出す、発生、身振り、表情といった前言語的な要素が形成する主体感の問題や(ガタリ 2017=1992)それを引き継ぐM・ラッツァラートによる非シニフィアン記号論の政治活用についての議論(ラッツァラート 2015)なども、映像表象と関連するため適宜参照している。だが本研究では、物理哲学者のD・ボームが示した「対話」の意義を、論考の基礎においた(ボーム 2007=1996)。それは、議論に到達すべき目標はないが、話し合いのなかでお互いの問題意識を共有し、新たな思考のプロセスを集団の間で開いてゆく、ドゥルーズの「思考イメージ」にも似た効果を評価するものだ。ドキュメンタリー作品表象を扱う場面では特にこれを意識し、そこにある「対話的様式」が孕む、思考を触発する可能性の開示に努めた。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

以下、前項(1)で示したテーマに沿って成果を示す。

初期テレビドキュメンタリーが示した新様式 NHK『日本の素顔』をめぐる論争

「対話的様式」に準じる映像表現は、すでに1950年代の映画ドキュメンタリーのなかにも、ヌーヴェルヴァーグの影響と自らの制作実践から生み出した岩波映画の羽仁進作品などのなかに確かに生じている。しかし、50年代末に生じたNHKのドキュメンタリー番組『日本の素顔』をめぐる「素顔論争」は、テレビと映画の担い手が対峙することでさらなる刷新を生み出す原動力となっていた。この調査テーマでは、これを、論争の主要人物である羽仁とNHK・吉田直哉のやりとりを焦点を当て、それぞれの制作論の対立と重なり合いを検討することで明らかにした。二人の議論では、映画だけでなく、ラジオとテレビの放送メディア的手法が交錯していること。「対話的様式」の社会的意義や視聴者への効果が、早くも1950年代末の時点で具体化されていたこと。また、そこでは制作者の意図や問題を抱える被写体の思いを政治宣伝のように描くのではなく、被写体が抱える矛盾や困難を直視し思い悩む制作者の「思考の過程」を描くことによ

て、それをみる観客も共に映像世界に向き合い、制作者・撮影対象の人々・観客の三者が考え合うことのできる対話的な表現が目指されていたことが、この調査で明らかになった。

『記録映画』とテレビドキュメンタリーの歴史的共生関係

『日本の素顔』と、映画制作者の先鋭的論壇となった雑誌『記録映画』の同時代性に注目し、二つを言説と表現の面で比較分析した。『記録映画』を主導した松本俊夫は、映画史の文脈で、観客の思考を触発する映像理論の構築者として評価されるが、こうした議論はすでに「素顔論争」の中心主題でもあった。松本は、「素顔論争」に触れることはなかったが、吉田直哉の論考が『記録映画』に掲載されたり、松本が羽仁作品を批判した内容（「残酷を見つめる眼」『記録映画』1960年12月）が、羽仁による吉田批判と重なっているなど、それを目にしていなかったとは考えられない。彼らの見た映像表現の新たな可能性は、同時代的な共生関係のなかで培われたものだったように見える。このことを、60年前後の松本や『記録映画』寄稿者の作品と、『日本の素顔』の描写方法と照合して、映像的に検証してみた。

松本の作品表現は、日本の軍勢力を批判する作品『安保条約』（1959年）では、軍事への危機意識を喚起するのみのメッセージで、観客への働きかけがほぼ旧来のプロパガンダと変わらない。一方『日本の素顔』は、軍勢力を扱う回でも、ナレーションと映像が発する印象のずれをつかって、危機意識と保有する現実を見据える意識が混じり合う複雑な表現で視聴者に働きかけ、思考の触発に寄与する表現を生み出していた。松本作品にそのような効果が見られるのは『西陣』（1961年）以降である。単純な政治メッセージは作品ごとに後退し、石切場の労働を描くテレビ作品『石の詩』（TBS、1963年）では、言語に還元できない抽象表現で視聴者の意識を触発する独自の映像世界が築かれた。松本がここに至るまでに、テレビが先行して見せた新しいドキュメンタリーのあり方がなんらかの影響を与えていたとすれば、テレビドキュメンタリーや「素顔論争」は、映画史にとっても無視できない出来事となる。

安保闘争によるプロテスト運動描写の変容

近年海外の研究でも着目される、プロテストの闘争映像自体の扇動性に関して、1960年代に既にあった日本の評論家の論争とテレビドキュメンタリーの実践について調査した。日本では、デモ隊の衝突映像が視聴者に対してプロテストへの賛同を広げる現象が、60年安保闘争時に生じていた。『キネマ旬報』誌上では、この映像の力をめぐって、NHK制作者と映画評論家の論争があり、その内容を見ると、プロテスト運動のような政治的テーマに対して、ドキュメンタリーの向き合い方が変容してゆく過渡期の様子が見えてくる。左派的信条の評論家は、映像の扇動性を視聴者動員に利用すべきと旧来型のドキュメンタリー描写を推奨したのに対し、放送法の公平性規定下にあるテレビ制作者は、扇動的映像で視聴者の政治操作を目論むのではなく、複雑化した映像音声の表現を用いて闘争を描写することで視聴者の政治問題への関心を涵養しようとする、「対話の様式」にも通じる新しい発想を示していた。また、当時のプロテスト運動を扱うテレビドキュメンタリーを検証したところ、その描写の多くは後者の目した方向に沿っていることが明らかになった。

映画作家とテレビドキュメンタリー NTV『ノンフィクション劇場』の試み

前項で示した、ドキュメンタリーの働きかけに関する、政治扇動から対話的な政治関心の涵養への変化が、その後テレビだけでなく映画人にも広がってゆく傾向があることを、革新左派的信条の映画作家が集まって制作されたテレビシリーズ『ノンフィクション劇場』を例に明らかにした。この番組は、チーフプロデューサー牛山純一などの発言によると、映画作家の政治信条を伝える作品を志向したように見えるが、実作品のドキュメンタリー描写はむしろ対話的な働きかけを採っている。これもプロテスト運動を扱う作品を検証すると明らかで、大島渚制作の「反骨の砦」（1964年7月4日）、牛山、大島、羽仁などの共同制作「ある国鉄乗務員 スト前夜」（1964年4月19日）、土本典昭制作の「市民戦争」（1965年12月12日）と、全て政治闘争を扱いながら、扇動的な記録映像に表現上の工夫を加え、運動参加の呼びかけではなく、視聴者意識の涵養を図るような作品になっていた。特に、このシリーズの企画として始まったが、テレビ番組としては頓挫し自主映画のかたちをとる土本の『留学生チュア・スイ・リン』（1965年）の描写は興味深い。国費留学生の除籍処分撤回を求める学生闘争を描いたこの作品で土本は、闘争への連帯を個人的な信条として示しながら、それを映画で観客に押しつけてはいない。この運動には、大学学長が当事者チュアを復学させる英断を下し、学生と学長が円満に和解する場面が訪れる。ここは、闘争の継続を望む土本の意図にそぐわない部分だが、削除するのではなく、自らの意識と出来事のずれを見せることで、視聴者に批評的な判断を求める描写にまとめられた。土本は、この作品制作を通し、テレビの非政治的なあり方と葛藤していたが、物事を伝えることに重きを置く放送メディアのあり方は継承しながら、観客に対するドキュメンタリーの新しい政治的働きかけを模索している。その姿勢には「対話の様式」と共鳴する部分が多い。

60年代後半のプロテストドキュメンタリー 小川プロ作品など

フランス五月革命の影響で、日本でも激しい学生闘争が繰り返られる時代に制作された自主ドキュメンタリーでは、多様な人々の肉声と姿を凝視する「対話の様式」が頻出する。ここでは、具体的にそれがどう用いられたのかを、小川プロダクションの作品など、プロテスト運動を描く自主作品を例に検証した。当時、成田闘争などの政治問題をめぐり中立報道を倫理とするテレビ局では混乱が生じた（萩元ほか1969）。小川伸介などの小川プロの面々は、そうしたテレビの姿勢を尻目に闘争に飛び込み、プロテスト側に寄り添ってドキュメンタリーを制作する。しかし、完成した作品はテレビドキュメンタリーの姿勢に重なる手法で、対象となる人々の活動や肉

声を綿密に捉え、時に、制作者がかれらと意見を戦わせたり、その不都合に映る姿も開示しながら、政治運動動員の呼び掛けではなく、闘争を否定的に見る人物ですら関心を触発される対話的作品になっていた。また同時期、別の制作者が学生運動を撮った『にっぽん零年』(1969年)は、さらに対話性を深めるように、運動の当事者学生が、意見や立場を異にする人物に向き合い議論してゆく姿を描写し、運動の多様な側面に考えをめぐらすよう観客を喚起する作品となっている。この時代にも、闘争側が自ら制作するドキュメンタリーはいくつかあるが(『鬼っ子・戦う青年労働者の記録』(1969年)、『怒りをうたえ』(1968~70年))、それらも闘争への賛意を安直に求めるような内容ではなくなっていた。

水俣病事件とドキュメンタリー

調査途上、60年代日本社会の裏面で進展した水俣病事件のドキュメンタリー描写に「対話的様式」が役立てられていたことを発見し、研究に取り入れた。水俣病は、原因企業が大部分の市民生活や日本経済の根幹を支えていたため、企業の被害者側に対する表面的な責任問題を越えて、患者補償で企業が潰れることを恐れる市民と被害漁民の諍いなど、複雑な政治対立を生み出してしまった。この現実を伝えようとしたドキュメンタリーは、自ずと「対話的様式」のような方法を選び取り、多様な当事者の姿と声に視る者を向き合わせる作品となっている。これは、有名な土本典昭の映画だけでなく、テレビドキュメンタリーや石牟礼道子の『苦海浄土』にまで共通した特徴だった。調査できたかぎりテレビドキュメンタリーについて述べれば、熊本放送制作『111~奇病15年のいま』(1969年)などは興味深い。この作品は、告発的な態度を犠牲にした部分があるものの、何十人も多様な当事者たちからインタビューを集め、それぞれが抱える利害の複雑さなどを映像表現の工夫で巧みに描写し、水俣病問題の実像を伝えることで問題への関心を広く喚起しようとしていた。しかも、こうした姿勢は、初期のNHK番組『日本の素顔・奇病のかげに』(1957年)にも垣間見えるものである。水俣病のテレビドキュメンタリーは、公平性を意識せざるを得ない放送メディア環境の制約と、水俣病問題の抱える複雑な対立関係の狭間をすりぬけながら、なおかつ、経済発展の恩恵を望む高度成長期の市民や国民に向けて制作されねばならなかった。だがそのことが、告発のようなメッセージへの単純化ではなく、人々の肉声を通して問題の多面性に視聴者を向き合わせる「対話的様式」を作品の表現に呼び込んでいくことが、調査を通して見えてきた。

(2) 得られた成果のインパクトや今後の展望など

ドキュメンタリー映像をめぐって、テレビと映画、ラジオ音声や文学との連関なども辿る間メディア的な研究となったため、映画研究だけでなく、メディア研究、社会学など人文学の多様な側面に横断的なインパクトを残すことができると思われる。また日本の映像文化についての研究ではあるが、意見衝突を抱えた政治問題へのドキュメンタリーの向き合い方という点で示唆の多いこの研究の成果は、人間の富と地球環境の保全が相反するエコロジー問題など、対立関係が複雑化する現代政治を扱った海外ドキュメンタリーの研究にも有益なインパクトとなる。今後の展望としては、成果を著作として出版することはもとより、未だ研究の余地が多いラジオドキュメンタリーの表現についても、「対話的様式」の前史として引き続き調査を深めたい。また、新たに研究テーマとして浮上した水俣病ドキュメンタリーについては、別の科研費研究(19K12989)で継続する。

引用文献

- Bill Nichols, *Introduction to Documentary*, Indiana University Press, 2016
佐藤忠男、日本記録映像史、評論社、1977
Takuya Tsunoda, *The Dawn of Cinematic Modernism: Iwanami Production and Postwar Japanese Cinema*, Yale University Dissertation, 2015
Markus Nornes, *Forest of pressure :Ogawa Shinsuke and Postwar Japanese Documentary*, University of Minnesota Press, 2007
金子遊、映像の境界 アートフィルム/ワールドシネマ、森話社、2017
崔銀姫、日本のテレビドキュメンタリーの歴史社会学、明石書店、2015
宮田章、『日本の素顔』と戦後近代 テレビ・ドキュメンタリーの初期設定：現実が「コンテンツ」になった時、放送研究と調査、2014
丸山友美、ラジオ・ドキュメンタリー『録音構成』の成立：NHK『街頭録音』と『社会探訪』、マス・コミュニケーション研究、2019
Yuriko Furuhashi, *Cinema of actuality : Japanese Avant-garde Filmmaking in the Season of Image Politics*, Duke University Press, 2013
ブリュノ・ラトゥール、社会的なものを組み直す アクターネットワーク理論入門、法政大学出版局、2019 = 2005
Raymond Williams, *Television: Technology and Cultural Form*, Routledge, 1974=1990
グレアム・ハーマン、非唯物論 オブジェクトと社会理論、河出書房新社、2019 = 2016
フェリックス・ガタリ、カオスモーズ、河出書房新社、2017 = 1992
マウリツィオ・ラツァラート、記号と機械 反資本主義新論、共和国、2015
デヴィッド・ボーム、ダイアログ、英治出版、2007 = 1996
萩元晴彦ほか、おまえはたたの現在にすぎない テレビになにが可能か、田端書店、1969

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 洞ヶ瀬真人	4. 巻 8
2. 論文標題 対話を触発するドキュメンタリー 60年代学生運動映画の表現様式をめぐって	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 JunCture 超域的日本文化研究	6. 最初と最後の頁 136 - 149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/juncture.8.136	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 洞ヶ瀬真人	4. 巻 96
2. 論文標題 プロテスト運動とテレビドキュメンタリー 闘争映像の政治性と60年代テレビドキュメンタリーの表現	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 マス・コミュニケーション研究	6. 最初と最後の頁 121 - 138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 1件／うち国際学会 5件）

1. 発表者名 洞ヶ瀬真人
2. 発表標題 Televisual Aesthetics as a Tool for New Politics of Documentary: Local TV documentary's Voice Representation for the Minamata Disease
3. 学会等名 The 2019 International Conference of Contemporary Cinema Research Institute（韓国・漢陽大）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 洞ヶ瀬真人
2. 発表標題 映像音声で紡がれた水俣病と現代環境の渦 テレビドキュメンタリー『苦海浄土』（1970）の表現
3. 学会等名 カルチュラル・スタディーズ学会Cultural Typhoon 2019（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 洞ヶ瀬真人
2. 発表標題 プロテスト運動とテレビドキュメンタリー：60年代ドキュメンタリーにおける闘争描写の変容
3. 学会等名 日本映像学会第44回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 洞ヶ瀬真人
2. 発表標題 水俣ドキュメンタリー再読：水俣病事件の社会・メディア環境とドキュメンタリー映像表現の深化
3. 学会等名 日本マス・コミュニケーション学会2018年度春季研究発表会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 洞ヶ瀬真人
2. 発表標題 テレビ時代のメディア環境と水俣病ドキュメンタリーの映像表現：熊本放送初期作品を中心に
3. 学会等名 2018年度日本映像学会中部支部第一回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masato Dogase
2. 発表標題 Minamata Disease within the Television Documentary Ecology
3. 学会等名 Association for Asian Studies Annual Conference 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masato DOGASE
2. 発表標題 Changing ' Dialogue ' Toward Risk From Post-War To Post-Fukushima: A Comparative Analysis Of Old And New Godzilla
3. 学会等名 The 10th International Convention of Asia Scholars (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 洞ヶ瀬 真人
2. 発表標題 60年代ドキュメンタリー表現の複雑化 『記録映画』と『日本の素顔』の比較分析
3. 学会等名 日本マス・コミュニケーション学会2017年度秋季研究発表会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 洞ヶ瀬 真人
2. 発表標題 プロテスト運動とテレビドキュメンタリー 60年代ドキュメンタリーにおける闘争描写の変容
3. 学会等名 日本映像学会第44回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 洞ヶ瀬 真人
2. 発表標題 水俣病事件の社会・メディア環境とドキュメンタリー映像表現の深化
3. 学会等名 日本マス・コミュニケーション学会 2018年度春季研究発表会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 洞ヶ瀬真人
2. 発表標題 Concealing with Sunshine: Audio-visual displacements of violence in prewar Japanese military films
3. 学会等名 Association for Asian Studies Conference in Asia (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 洞ヶ瀬真人
2. 発表標題 増幅された「シネマティズム」 『桃太郎 海の神兵』の知覚的プロパガンダ戦略をめぐって
3. 学会等名 日本映像学会 中部支部 第一回研究会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Hideaki Fujiki, Alastair Phillips	4. 発行年 2020年
2. 出版社 British Film Institute	5. 総ページ数 384
3. 書名 The Japanese Cinema Book	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>水俣ドキュメンタリー再読 水俣病事件の社会・メディア環境とドキュメンタリー映像表現の深化 http://mass-ronbun.up.seesaa.net/image/2018spring_C3_Dogase.pdf 60年代ドキュメンタリー表現の複雑化 『記録映画』と『日本の素顔』の比較分析 http://mass-ronbun.up.seesaa.net/image/2017fall_D2_Dogase.pdf</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	藤木 秀朗 (Fujiki Hideaki)	名古屋大学・人文学研究科・教授	
研究協力者	フィリップス アラスデア (Phillips Alastair)	ワーリック大学(英国)・映画テレビジョン学科・教授	
研究協力者	丸山 友美 (Maruyama Tomomi)	福山大学・人間文化学部・専任講師	
研究協力者	宮田 章 (Miyata Akira)	NHK放送文化研究所・上級研究員	
研究協力者	慶田 勝彦 (Keida Katsuhiko)	熊本大学・人文社会科学部・教授	
研究協力者	鈴木 啓孝 (Suzuki Hirotaka)	熊本大学・人文社会科学部・准教授	
研究協力者	香室 結美 (Kamuro Yumi)	熊本大学・人文社会科学部・特任助教	
研究協力者	村上 雅通 (Murakami Masamichi)	長崎県立大学・名誉教授	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	西田 善行 (Nishida Yoshiyuki)	流通経済大学・社会学部・准教授	
研究協力者	小林 直毅 (Kobayashi Naoki)	法政大学・社会学部メディア社会学科・教授	
研究協力者	畑 あゆみ (Hata Ayumi)	認定NPO法人山形国際ドキュメンタリー映画祭・事務局長	